

疎開

隈元達雄

“疎開”ということばはいまや死語にちかくなつたようだ。しかしこれは我々の世代が語り継がねばならない言葉の一つだろう。

父が召集令状で狩り出され、7人の子供と父の母親までを一身に背負わされた母の戸惑いと苦勞はどれほどのものだったのか。戦火の迫るなか母の中で行き先はただ一つ、生まれ故郷の上東郷村（薩摩川内市）の五社しかなかったのだ。

そこで用意してもらった家は、叔母の家の数百坪の屋敷の中に離れとして建てられていた。部屋も3つくらいはあった。しばらくして、そこに父方の叔母一家も、叔父の復員を待つかたちで、同じ鹿児島市内から疎開してきた。

当時その五社には、甕島からの学童疎開組や、近くには兵隊さんたちもいた。そして或る日その兵隊さんたちが軍靴の音もけたたましく、叔母の家に集まってきた。ラジオでなにか発表があるらしい。わずか5歳の私がそれが玉音放送だったと知ったのはもう少し大きくなってからのことだった。

昭和21年4月東郷小学校に入学、ここには3年生の途中で鹿児島市に引き揚げるまでお世話になった。その間一番下の妹が“面庁”にかかり母の背中で死んでしまった。葬儀では従兄弟たちが手作りの小さな棺を用意してくれて、しめやかに葬ってくれた。そんななか母は、闇屋をするために集落の農家をまわり、現金や持っていた着物と、米など食物と物々交換をする筈生活だったようだ。そうして集めた物資を背に宮之城線の楠元駅から乗車し、川内駅で鹿児島本線に乗り換えて鹿児島市まで売りに出かけていた。

そんなある日ついに悲しい知らせを持って、遠い縁戚にあたる山下村長が我が家にみえるのである。「父の戦死」の公報であった。昭和20年6月1日フィリピンのルソン島での戦死、という重たい現実であった。出征した父の足取りは、満州までは手紙や写真が送ってきてわかっていたが、まさかフィリピンまで行っておりしかも戦死とは……。というのが母の気持ちであったろう。諦めきれない母は、その後どんな根拠で戦死がはっきりしたのか、ルートをたどり調べていたが、千葉県在住で父と同じ隊の戦友からの情報であったことを知り、その方に手紙を出して真相を聞いたようだ。

その方から返事があり手紙には、自分は父と同じ隊を途中で抜けたが、その後の情報で隊が全滅したと聞いた。父が生前よく鹿児島に残した家族の話をしていたので、お知らせしようと思ったとのこと。その手紙は今も我が家の箆笥の底にねむっている。

それより前、叔父は無事復員し、叔母と一緒に鹿児島に帰っていった。我が家も、田舎では生活できないということで、叔父を頼って鹿児島市に帰ることになった。母以外には働き手のいない我が家が、それからどうやって生計をたてるのか、たくさんの子供たちの教育の問題や祖母までかかえた母の苦勞の第二幕が、ここからまた始まったのである。

当時は、まわりにも似たような境遇の家庭も多く、皆が必死に生き抜いていく時代だったからこそ、我が家もなんとかここまで生きてこられたのだろう。

その波乱に満ちた生涯をおくった母も60歳近くまで働き大変だったが、晩年は孫やひ孫たちもよく訪ねてきて、42歳で戦死した父の分まで長生きをして92歳で人生の幕を閉じた。あれから8年が過ぎてしまった。

墓参りするたびに墓標に刻まれた母の享年92歳という文字が、なにかしら誇らしげにみえる。

(2007, 10月記)